共謀通信
KYOBO TSUSHIN
2017.7.8-7.9

藝術を共謀せよ！

社会超克の反動藝術の祭典。『鋼鉄のオペラ』総動員ダ！

平成29年、7月8日―7月9日 バンカート横浜にて秘密集会決定。

モーツァルテ△ユーゲント再生

1983年に結成された藝術集団モーツァルテ△ユーゲントは、大阪を中心に30回近いギグをおこなうかたわら、熱烈な支持者をうみだしてきた。廃材や鉄骨を打楽器として使い、世紀末的な表現をするポストインダストリアル（工業神秘主義）と呼ばれる音楽スタイルと、ドイツ歌曲と電子音楽、アジテーションされたボイス、「ナチス」をおもわせるような衣装、サンプリングされカットアップされた映像など、異質な文化記号を融合させたポストモダン的な表現をおこない、さらに手法としてハプニングアートや舞踏などの身体表現、ビデオアートやインスタレーション、ミクストメディアの実験をおこなうなど、アートグループとして多くの伝説をうみだしてきた。とくに「洗脳ギグ」と名付けられたアートパフォーマンスのシリーズは、社会心理学的な実験に依拠した扇情的／強迫的なアプローチであり、メディアの暴力性、政治や社会の暗部、大量消費社会、生態系破壊など、人類文明の負の側面を抉り出すものであった。

伝説のパフォーマンス『鋼鉄のオペラ』

1986年に大阪南港近くの川崎倉庫でおこなわれた『鋼鉄のオペラ』はその集大成ともいえるパフォーマンスといえる。当日まで会場は告知されず、集合場所として大阪ミナミ、アメリカ村三角公園とその集合時間だけ告げられる。当日、集合時間に三角公園へ参加者が集まると、そこにはサイケデリックにペイントされた「天国バス」がやってきて、覆面をした男達に会場へと連行されるという導入。到着した川崎倉庫に参加者が入ると重たい鉄の扉は閉じられ、正面には白い布に炎の映像。その映像に本物の松明の火が点火され、燃え上がるスクリーンのむこうに鉄条網と廃材。鉄がきしみ、重低音ノイズが会場を制圧するなか、ナチスドイツの党大会における映像がサンプリングされ、ヒトラーの演説の音声が流される。男性合唱団がドイツの戦車隊の軍歌を歌い、鉄工所工員の格好をした5人の男達がドラム缶をパーカッションとして叩く。さらに女性シンガーのマドカが、ドイツ歌曲をうたうという、多重音像による騒音芸術。最後は倉庫の奥から現れたフォークリフトの荷台に飛び乗って、ボーカルのマドカが去っていくという演出。暴力的にデタラメでカオスな展開に参加者は度肝を抜かれ、『鋼鉄のオペラ』は伝説となった。参加者は口々にいう。「いったいあれは何だったのだろう？」まさに「洗脳」なのか。1987年『鋼鉄のオペラ』を最後にモーツァルテ△ユーゲントの活動は休止する。男性4人のメンバーはPBCというバンドへと移行し、アートインスタレーションと映像を担当していた松陰、平野はその後、現代美術ユニット、コンプレッソ・プラスティコを結成し、各自の活動の場はコマーシャルに移行し、80年代がおわり、90年代をむかえるのであった。

2017年『鋼鉄のオペラ』の再構成・再演

2017年7月、伝説のライブ『鋼鉄のオペラ』の再構成／再演が決定した。「世界が闇につつまれる時代、「藝術」はふたたびひとを自由にするために蘇る」その予言の言葉どおり、「藝術」は共謀のネットワークの武器として、その表象として『鋼鉄のオペラ』を要請した。PBCのメンバーを核として、ひとり、そしてまたひとりと同志が集まり始めている。

この世界おかしいと思わないか？

なにかおかしい。3・11以降、地軸がずれたかのようだ。息苦しい。陰が極まって陽に転じるように。なにかもがアベコベになっていきている。酸素が足りないのではない。社会にヘモグロビンが欠如している。この世界は鉄分が足りないのだ。時代の血液のなかに「藝術」という鉄分を打ち込み、「自由」という酸素を存分に呼吸したい。あなたのなかで、大切ななにかが「崩壊」してしまう前に。鉄を叩き、眠りこけている自分の頭を目覚めさせ、固まった価値観をたたき壊し、ここから脱出を試みる、勇気をもとう。まずは目撃し、立会い、その隠喩を読み解いて伝えて欲しい。

世界を変えるためではなく、世界によって変えられないために沈黙のなかで、共謀を藝術せよ。

太陽の陽射しは、夜を追い払い、偽善者どもが盗み取った権力を減ぼす。（モーツァルト『魔笛』より）

Die Strahlen der Sonne vertreiben die Nacht,
Zernichten der Heuchler erschlichene Macht.